

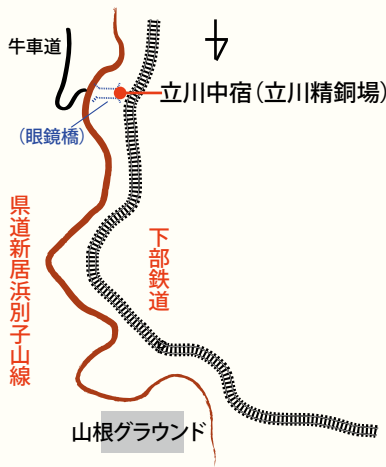
別子往還道を訪ねて

マイントピア別子から県道新居浜別子山線に出て市街地へ向かうと、県道の対岸には端出場から下る下部鉄道跡の橋脚、トンネルなどをあちこちで見ることができます。大きな石積のある場所もあるのですが、一度ゆっくり見てください。なお、この付近の下部鉄道跡は立ち入り禁止となっています。

この山間部である立川町には、かつて立川中宿^{なかしゆく}があり、別子銅山で採鉱、焼鉱された粗銅^{あらしゆく}輸送の中継基地となりました。現在の立川自治会館あたりに建物がありました。粗銅の輸送にあたったのは仲持ちと呼ばれる運搬人で、男性が約45kg、女性が約30kgの荷物を背負い、旧別子から約10kmの道のりを運んでいました。ここから新居浜口屋（今の口屋跡記念公民館）までは、馬などで輸送されていました。江戸時代元禄期の別子銅山開坑当初は天満浦（四国中央市土居



現在の立川中宿跡



町）まで約35kmの輸送路でしたが、幕府から新居浜へ輸送することの許可を得て、輸送距離の短縮を図ることができました。同時に別子銅山永代稼行の許可も得られ、将来にわたる鉱山経営の安定化を図ることができたのです。明治2年（1869年）には、立川精銅場が操業開始し、明治24年（1891年）に惣開製錬所に統合されるまで、粗銅を精銅とする作業工程が行われました。県道側の山から降りてくる道が、かつての牛車道です。広瀬宰平が、フランス人鉱山技師ラロックに作成させた「別子鉱山目論見書」の提言に基づき、別子から立川までの運搬車道の整備を行いました。現在、足谷川には立川自治会館へ渡る龍川橋が架かっていますが、そのすぐ上流に、その形から眼鏡橋と呼ばれる石造りの橋が架かっていました。橋の正式な名前は、不朽橋でしたが、明治32年（1899年）8月の別子大水害により流失してしまいました。

広告欄

広告欄